

2023年5月28日（日）聖霊降臨祭朝礼拝説教

『故郷の言葉』井上隆晶牧師

使徒言行録2章1～13節、ヨハネ福音書14章15～21節

①【聖霊は「突然」降ってきた】

今日は聖霊降臨祭です。イエス様が復活して50日目の祭りなので「五旬祭」ともいい、ギリシャ語で「ペンテコステ」といいます。この日、何が起こったのかを聖書から見てみましょう。

「五旬祭の日が来て、一同が集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。一同は、聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、他の国々の言葉で話し出した。」(1～4節)

聖霊はギリシャ語で「ハギオス プネウマ」といいます。ハギオスは「聖」という意味で、神を現わします。神以外に聖なる方はおられません。プネウマは「息・風」という意味です。ですから聖霊は神の口から出る息ですから、神の性質もっているのです。造られたものではなく、神から出た神であって、万物を創造し、創造したものに生命を与えて動かし、万物に浸透して変容させ、完成へと導く神です。このように聖霊は神ですから、父と子と同質、同格、同能力、同座なる方であり、主と呼んでいいのです。聖霊は「突然」降ってきました。神を人間が操作できないように、聖霊も人間はコントロールすることは出来ません。聖霊が主人であって、私たちは僕です。彼は自由に吹き、自分が決めた時に、自分が選んだ人に降り、賜物を与えてその人を自分の道具にします。

②【聖霊は姿を変えるが、それは賜物の豊かさと使命を教えている】

続いて炎のような舌が、分かれ分かれに現れて、一人一人の上にとどまりました。聖霊はその時々、姿を変えて現れます。イエス様が洗礼を受けた時は「鳩」の姿でしたが、使徒たち（教会共同体）の上には「炎の舌」の姿で現れました。それは聖霊の賜物を受けた者の使命を教えています。鳩の姿の時は人々にノアの洪水を思い起こさせ、イエス様こそ人々を救う真の箱舟であることを知らせるためでした。炎の舌の姿の時は、シナイ山における神の炎の言葉を思い起こさせ、神の言葉を世界中に語らせるためでした。事実、エジプトを出て50日目にイスラエルの民は律法をもらったように、教会は50日目に神の言葉をもらったのでした。

③【上からの力をいただいて教会も人も動く】

よく、この日に「教会が生まれた」という人がいますが、厳密に言うとうそではありません。教会は既にイエス様が復活した日の夕べ、主が弟子たちに息を吹きかけ「聖霊を受けなさい」（ヨハネ 20：22）といわれた時に、イエス様によって

創造されました。でも教会はまだ「動き出す力」がありませんでした。そこでイエスは「高い所からの力」(ルカ 24:49、使徒 1:8)を受けるまでは、エルサレムを離れず待っていなさいといわれたのです。ちょうど最初の間人アダムがキリストによって土から造られた時、形は出来ていましたが、動くためには「命の息」がその鼻に入らなければなりません。同じように、ここでも新しく創造された教会(新しいイスラエル)は出来ていたのですが、動くためには「命の息」が入らなければならなかったのです。そこでこの日、聖霊は自ら降り、教会に神の息を吹き入れたのです。そこで教会は動き出し、キリストの業を受け継ぎ、地上におけるキリストとして、主と同じ働きをし始めたのです。それはイエス様も預言されていたことでした。「私を信じる者は、私が行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。」(ヨハネ 14:12) そのようにして教会は世界中に宣教に出かけ、病気を癒し、悪霊を追い出し、聖書を作成し、典礼を作り、教会を建て、貧しい人を助け、様々な教会芸術を作ったのです。これらはすべては聖霊がさせたのです。

④【祈って聖霊を待とう】

伝道は自分の力、人間の力でするものではありません。伝道だけでなく、神の業はすべて人間の力でするものではありません。これははっきりしています。上からの力を貰わないと動けないし、何も出来ないのです。現代の教会に問題があるとするなら、神の力を貰わないで人間の力だけでやろうとしている事にあります。それはエジプトで同胞を救おうとした善意あるモーセと同じです。それがたとえ善いことだとしても、人間の力では続かないのです。モーセは40年待たされました。ひたすら待ち続け、ひたすら祈り続ける者に聖霊は降り、そのような者が最後には神の道具になるのです。

●今回、教区総会に行き、バランスの悪さをはっきりと感じました。沖縄の基地反対の議案が出されたのですが、その中に神が一言も出て来ません。悪い議案ではないのですが、人間の思いでやっているように感じました。一方、伝道師になる先生の式を行う前に、教団の信仰告白を唱えるべきだという意見が出て、議場は二つに分かれました。これも別に悪い事ではないのですが、こちらは規則だけで人間味がないのです。一方は神がおらず、一方は人間がいない。バランスを失った教会の姿です。信仰のバランスを失うと、行動もバランスを失います。私はマザー・テレサの言葉を思い出しました。「私は毎日、二つの聖体拝領をします。第一の聖体拝領は早朝のミサの中で。第二のそれは、その後、街の中で(行き倒れの人のこと)。現代の矛盾は、第一の聖体拝領をする人たちが第二のそれをしないことであり、第二の聖体拝領をしている人たちが、第一のそれを知らないことです。」神と人のバランスが大事なのです。この教会は7年間祈って今のスタイルが出来ました。7年の間、私は悩み、ひたすら祈り続けました。7年後に聖霊は私を突然、動かしたのです。聖霊が動かすと人は動きます。せざるを得ないような

衝動に駆られ、恐れがなくなり、迷いません。必要な物も与えられるのです。

キリストはいつも行動する前に、朝早く起きて神に祈りました。そして聖霊に満たされて出かけて行き人と交わりました。「神と交わり人と交わる」、この両方がキリストの姿であり、教会の健全な姿なのです。祈りもしなければ、人とも出会わずでは神の栄光も現れません。聖霊によって動かされることが大事です。

⑤【故郷のことば】

大きな音を聞いてエルサレム中の多くの外国人たちが、集まってきました。そして彼らは「自分たちの故郷の言葉」で、神の偉大な業を聞いて驚きました。(炎の舌に驚いていない) 私は「自分たちの故郷」という言葉に心がとまりました。私たちの故郷はどこでしょう。人それぞれです。私は長野県の伊那市です。故郷に帰ると懐かしく、思い出がよみがえってきます。故郷は自分が育った場所、自分を温かく迎えてくれる人がいる場所です。しかし田舎の人も景色もどんどん変わります。親が亡くなれば故郷にも帰らなくなります。地上にある故郷は本当の故郷ではなく、永続する故郷ではありません。私たちキリスト教徒の本当の故郷は「天の国」です。「私たちの本国は天にあります。」(フィリピ3:20)とパウロはいいました。教会は天の故郷のひな形です。教会に帰ると私たちは天国の香りを嗅ぐのです。それは愛と赦しの香りです。自分が洗礼を受けて生まれ育った場所、自分の失敗を赦し温かく迎えてくれる場所、共に苦労した友がいる場です。私は特別伝道集会でいろんな教会に説教に行きますが、どこの教会に行っても、そこには不思議な懐かしさと、同じ香りがするのです。そして私たちクリスチャンにとっての「故郷のことば」とは神の言葉なのです。

●26日(金)の朝の祈りでイザヤ書を読みました。そこに「私はあなたを忘れることは決してない。見よ、私はあなたを私の手のひらに刻みつける。」(49:15~16)「私は生きている。と主は言われる。」(同18節)とありました。人が神を忘れても、神は私を忘れないのです。私の祈りも覚えているという事です。そこに希望があります。いったいどの宗教に、「私は~である」と語る神がいるでしょうか。神を知りたいと思えば、聖書を読むしかありません。キリストを通して神は完全にご自身を現わされました。キリストの言動を見て、恐れる人がいますか? 恐れなかったからこそ罪人や病人たちは安心して近づいたのです。キリスト以外の神を想像してはなりません。あの方がいかに慈しみ深いかを知りましょう。

神の思いが見えてくると、自分がちっぽけに見えてくるのです。神の愛の方が大きいのです。神の赦しの方が大きいのです。神の誠実さは天を超えて高く、神の御計画は深く、必ず成るのです。聖霊がその人に降ると、神が大きく、大きく確かに見えて来るのです。だから平安に包まれるのです。故に聖書を読み、祈って聖霊を待つのです。聖霊を受けて神様の道具となりましょう。